The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	黄遵憲「台湾行」について
Author(s)	ファンダム, トム
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2018, 52, p. 31-43
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/76071
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

黄遵憲「台湾行」について

ファンダム　トム

キーワード：黄遵憲／日清戦争／台湾民主国

一、はじめに

清末の詩人黄遵憲は外交官でもあり、日中友好を提唱した重要な人物の一人である。一八七七年から一八八四年にかけて日清修好条規に基づき東京に派遣され、その間、日本の文人と親しく交流し、日本への理解を深めた。しかし近代以降、清と日本とは敵対関係にあったため、黄遵憲も外交官として日本側と激しく争うことが多かった。彼の日本に対する思いは複雑なものであったと推察される。

清と日本との敵対関係の結果として、一八九四年、日清戦争が勃発する。その時、黄遵憲はすでに日本を離れて十年であった。祖国の命運を決する重大な戦いであるのに加えて、かつて好ましく接していた日本を敵とする戦いであったため、日清戦争に寄せる黄遵憲の関心は極めて深く、戦争終了後まもなく、平壌の戦い、旅順の戦いなど主な戦闘を主題とする叙事詩を数多く書いた。それらの詩には、敗戦への悲嘆や清朝政府の不首尾に対する皮肉を込めた批判が読み取れる。

黄遵憲の日清戦争に関する作品のうち、本稿ではいまだに日本語や英語に翻訳されていない「台湾行」と題する作品を取りあげ、解釈を加えてみたい。[1]

二、乙未戦争の経緯

黄遵憲の「台湾行」は乙未戦争（台湾平定）の出来事を詠う叙事詩である。ここではまず乙未戦争の経緯について述べておこう。[2] 一八九四年に勃発した日清戦争は、最初の段階では朝鮮半島を舞台に闘われたが、日本軍の攻勢を受けて、主戦場は次第に中国の東北地方や山東半島一帯へと移ってゆき、山東半島沖の黄海における一連の海戦で日本海軍は清の北洋艦隊を撃破する。一八九五年四月、清と日本は下関で和平条約（下関条約）を結び、清は朝鮮の自主を認め、日本に対して賠償金を支払う上に、遼寧半島、台湾や澎湖諸島を割譲することとなった。同月、ロシア、フランス、ドイツが介入し（いわゆる三国干渉）、遼寧半島を清に返還させたが、台湾や澎湖諸島はそのまま日本へと割譲された。

当時の台湾は、台湾省として清朝の一部に組みこまれていたが、北京にある中央政府の影響はあまり受けておらず、地元の有力者は独立を狙っていた。彼ら台湾独立派は、一八九五年五月二十五日、台湾民主国を名乗る共和国を成立し、台湾巡撫唐景崧が総統に就任した。唐景崧は台湾民主国が兵力不足だと悟り、台湾省の守備隊に加えて、故郷の広東省から傭兵を約千二百人を雇うことにした。台湾民主国の新軍隊は首都の台北で日本軍の襲来を待ち受けていた。四日後、日本軍は台湾の西北にある澳底から上陸し、六月三日に基隆を占領する。六月七日、辜顕栄などの台北の郷紳の手で台北は無血開城されるに至る。その四日前に、総統の唐景崧はドイツ商船のアーサー号で大陸に逃亡してい

た。台北の陥落により、北部は日本軍によってほぼ平定されたが、台湾民主国は台南に移り、劉永福の下で同年の十一月まで抗日運動を続けた。しかし、十一月十八日、台湾総督樺山資紀は全島平定宣言を発表し、乙未戦争は正式に終戦となった。

三、「台湾行」と日清戦争後の黄遵憲

黄遵憲は「台湾行」だけでなく、日清戦争に関する連作の叙事詩を作っている。戦争の経緯を追って「悲平壌」、「東溝行」、「哀旅順」、「哭威海」、「降將軍歌」、「度遼將軍歌」、「馬關紀事」、「臺灣行」といった作品が書かれ、『人境盧詩草』に収められる。同書に注釈を施した銭仲聯『人境盧詩草箋注』によると、「台湾行」も含めて、これらの詩はすべて『人境盧詩草』の原稿にはなく、戊戌（一八九八年）、つまり戦争の三年後に帰郷した後に補作されたものである。(3)

日清戦争勃発後の黄遵憲の足跡は次の通りである。(4) 一八九四年の十一月、シンガポールの任期が満ちると、両江総督の張之洞により顧問として雇われた。一八九五年、康有為が設立した改革派組織自強会に加入する。一八九六年、十日ごとに発行される時務報を設立し、有名な改革論者梁啓超を編集者として迎える。一八九七年には、光緒帝の支持により湖南省の塩法道に就任し、湖南省の改革運動にかかわる。一八九八年、戊戌の政変が始まると、康有為は梁啓超、譚嗣同、黄遵憲などの進歩的な知識人を北京に召喚するが、黄遵憲は当時、体調不良のため北京に行けなった。戊戌の政変は百日足らずで失敗に終わり、康有為や梁啓超は海外に逃亡、譚嗣同を含めて改革派六名が逮捕、処刑された。政権を奪還した西太后は、康有為や梁啓超が黄遵憲の家に逃亡したと疑い、彼の逮捕を命じたが、結局、彼の

家に逃亡者がおらず、ちょうどその時に中国にいた伊藤博文の干渉もあったため、黄遵憲は故郷の嘉応州（現在の広東省梅県）に引退を許された。彼は一九〇五年に没するまで故郷の人境廬にあって詩の執筆に集中した。「台湾行」をはじめとする日清戦争に関する一連の詩はその時に最終的な形にまとめられたのである。

四、前半部の翻訳と解釈

以下、「台湾行」について解釈を加えていこう。「台湾行」は毎句押韻長篇詩であり、内容と押韻から前後半二つの部分に分けることができる。前半部は「台民」の視点から書かれている。[5] 韻は切迫した内容の調子にふさわしく、力強い仄韻によっている。

城頭逢逢擂大鼓　城壁より太鼓の音はドンドンと鳴り響き、
蒼天蒼天涙如雨　大いなる天は涙を雨のごとく流し、
倭人竟割臺灣去　倭人はついに台湾を奪い去った。

この三句は、いわば詩の序文であり、日清戦争の結果、台湾が日本に割譲されたことを述べている。

當初版圖入天府　もとは天命を受けた我が朝の領土、
天威遠及日出處　天なる権威は遠く日出づる地にまで及んだ。
我高我曾我祖父　わが高祖父、曾祖父、祖父が
艾殺蓬蒿來此土　荒れ草を切り開いてこの地にやってきた。
糖霜茗雪千億樹　霜のように白い砂糖や雪のように清らかなお茶を千億も植え、

歳課金錢無萬數　毎年数えきれないほどの税金が国へ納められた。
天胡棄我天何怒　天よ、なぜ我々を見捨てられたのか、なぜお怒りか、
取我脂膏供仇虜　わが血と汗の結晶を敵に引き渡してしまった。
眈眈無厭彼碩鼠　虎視眈々と厭くことなきあのずるがしこいネズミども、
民則何辜罹此苦　わが民は何の罪あってこの苦しみを味わわなければならないのか。

清はかつて優れた国であり、その威厳は遠く日本まで及んだ。その時から、本詩の話者の祖先は、艱難辛苦を経ながら台湾に移民し、砂糖キビやお茶の栽培に勤しんできた。にもかかわらず、彼らは朝廷に見捨てられ、虎視眈々と台湾を狙う日本に蹂躙されることとなった。

亡秦者誰三戸楚　秦を滅ぼしたものは誰かと言えば、たった三戸の楚、
何況閩粤百萬戸　まして台湾には閩と粤より移住した百万戸の民がいる。
成敗利鈍非所睹　成功するか失敗するかは眼中にない、
人人效死誓死拒　人々こぞって命をかけて死を懼れず抵抗する。
萬眾一心誰敢侮　もろびと心を一つにすれば誰も我々を侮ることができない、
一聲拔劍起擊柱　将軍は一声をあげて剣を抜き、立ち上がって柱に打ちつける。
今日之事無他語　今回の戦については異論は許さぬ、
有不從者手刃汝　従わざるものはこの手で斬るぞ。

しかし、台湾の民には希望がある。戦国時代「三戸の楚」の故事を用いて、閩（福建省）の移民と粤（広東省）の移民、合わせて百万戸が一致団結すれば大国である日本を倒せるという。(6)

堂堂藍旗立黄虎　　堂々たる青地の旗に黄色い虎が立ちあがる、
傾城擁觀空巷舞　　人々は町を傾けて押し合いながら眺め、通りを空にして踊る。
黄金斗大印繫組　　大きな黄金の印を帯につないだお役人、
直將總統呼巡撫　　巡撫どのはこれから総統と呼ばれることに、
今日之政民為主　　今日の政治は民こそが主人。
臺南臺北固吾圉　　台湾の南と北はもとより我が領土、
不許雷池越一步　　雷池を一歩たりとも超えることは許さない。

台湾の民の一致団結の結果、生み出されたのは台湾民主国である。台湾の人々は台湾民主国の旗（青地に黄色の虎が画かれる意匠の旗）の下で死を賭して台湾を守る意志を固めている。晋の将軍庾亮はかつて部下に手紙で「とどまって雷池を一歩も超えるな」と命じた。同じように、台湾民主国も領土の侵害を一切許さないと言う。(7)

以上、「台湾行」の前半部は、一八九五年の五月二十三日に発布した台湾民主国独立宣言から二十九日に日本軍が上陸するまでの状況を語っている。

五、後半部の翻訳・解釈

「台湾行」後半部は、前半部の楽観的な叙述を一転させる。前半部の力強く切迫した仄韻とは対照的に、後半部はすべて平韻によって押韻する。

海城五月風怒號　　海辺の町に五月の風が怒号し、

飛來金翅三百艘　小型の軍艦三百隻が飛び来る、
追逐巨艦來如潮　巨艦の後をまるで潮の如く追いかける。
前者上岸雄虎彪　先駆けの兵は雄々しい虎豹のように上陸し、
後者奪關飛猿猱　後に続く兵は宙を飛ぶ猿のように関所を奪う。
村田之銃備前刀　村田銃に備前刀、
當輒披靡血杵漂　ぶつかり合えば敵はなぎ倒され、杵を浮かべるほど多くの血が流れる。
神焦鬼爛城門燒　鬼神も焼き焦がれるほどの劫火に城門は燃え、
誰與戰守誰能逃　誰も持ちこたえられず、誰も逃げられない。

五月二十九日の日本軍上陸から六月七日の台北落城までを述べる。日本軍の武装について、村田銃や備前刀の名前を出してくる点、黄遵憲の日本通ぶりが見て取れる。台湾民主国軍の抵抗については一切言及しないが、それによって日本軍にまったく太刀打ちできない脆弱な軍隊であったことを示唆していよう。

一輪紅日當空高　一輪の赤い日（日章旗）が空高く上がり、
千家白旗隨風飄　家々に白旗がはためいている。
搢紳耆老相招邀　郷紳や長老たちが出迎え、
夾跪路旁俯折腰　路傍に跪き腰を折る。
紅纓竹冠盤錦條　赤いひもで竹の冠を結わえ腰には錦の組紐を巻き、
青絲辮髮垂雲髻　黒い辮髪に雲のような髻をたくわえたお歴々が、
跪捧銀盤茶與糕　跪いて銀の皿を捧げ、茶や餅を差し出す。

緒戦では多くの血が流されたが、辜顕栄など郷紳の手で台北が無血開城される。清の紳士の格好をした郷紳たちは日本軍を手厚く歓迎した。ここには彼らの卑屈な姿が描かれている。ニッキ・アルスドルフによると、このように台北の郷紳たちが日本軍に媚びたケースは多くあったという。この段の描写は、そのような歴史事実に基づいていると考えられる。(8)

將軍遠來無乃勞	將軍様、長旅でさぞお疲れになったでしょう、
降民敬為將軍犒	降伏した人々は（日本軍の）将軍のためにねぎらった。
將軍曰來呼汝曹	将軍は言う、「ともがらよ、近う寄るがいい、
汝我黃種原同胞	我々も汝らも同じ黄色人種の同胞。
延平郡王人中豪	延平の王であった（日本人の）鄭成功は人に抜きんでた英雄、
實闢此土來分茅	この地を開拓して諸侯を封じた。
今日還我天所教	今日、この地が我々の元に帰したのは天の計らい、
國家仁聖如唐堯	わが国の仁徳は唐や堯の如し。
撫汝育汝殊黎苗	汝らを慈しみ育むこと土民どもとは異なる、
安汝家室毋**譊譊**	汝らの家族を安らかにするからには、不満を言わないでくれ」。
將軍徐行塵不囂	将軍はゆっくりと塵も立てずに歩みさる、
萬馬入城風蕭蕭	万の馬が入城し、風が蕭々と吹く。
嗚呼將軍非天驕	「ああ、将軍はただの夷狄の酋長ではない、
王師威德無不包	日本軍の威勢や恩恵には限りがない。

我輩生死將軍操　我らが命運は将軍様の手にゆだねている、
敢不歸依明聖朝　どうして明徳ある聖なる王朝（日本）に服従しないでいられようか」。

右の段の最初の二句は郷紳たちの台詞で、その次の句から「**譊譊**」で終わる句までは将軍の台詞である。この「将軍」はおそらく台湾平定を命じられた樺山資紀台湾総督をさす。彼は日本人の血統を持った鄭成功を例に挙げて日本と台湾の歴史的な結びつきを強調し、清ではなく日本こそが古の優れた王朝のような仁徳を持っている国であるから、服従すれば手厚く守ってやろうと約束した。日清戦争当時の中国には、清ではなく日本こそが中華文明の継承者であると信じていた保守的知識人は少なからず存在した。樺山総督のこの台詞は、そうした背景のもとに発せられた可能性がある。次の「将軍」「万馬」の二句はまた第三者の語り手に戻り、台北の陥落の混乱が終熄し、状況が落ち着いたことを述べている。そして、最後の四句にまた郷紳の台詞に戻り、将軍や日本軍を誉め讃え、日本の聖なる王朝に服従するしかないと言っている。

噫嘻吁悲乎哉汝全臺　ああ、なんと悲しいことか、汝ら台湾の民よ
昨何忠勇今何怯　昨日までは皆な勇ましかったのに、今は何と惰弱なことか、
萬事反覆隨轉睫　ものごとは瞬く間に転覆してしまった。
平時戰守無豫備　平和な時に戦争に備え置かなければ、
曰忠曰義何所恃　いかに忠と言い、義と言ったところで何の頼りにもならないのだ。

詩の最後に韻がまた変わり、語り手である黄遵憲の乙未戦争に対する論評がなされる。黄遵憲は、台湾民主国の理想を勇敢だと評価し、その成功を望んでいたが、結局それはすべて崩壊してしまった。ここでは民主国の理想を唱えた人々の憶病さ、愚劣さを嘆いている。唐景崧や他の高官の逃亡については、詩には直接言及していないが、「今何怯」

という評価は彼らに対するものでもあるだろう。最後の二句は、台湾民主国の理想がいかに崇高であっても、しっかりと独立戦の準備をしていなければ結局何の役にも立たないという歎きの言葉である。

後半部を踏まえて前半部を読めば、かなり痛烈な「諷刺」として読めるだろう。シュミットが指摘するように、その「諷刺」は黄遵憲の日清戦争に関する連作詩に一貫して現れる。[9] 台湾の学者洪棄生はこの詩について、「この詩は傑作である、まるで仙人が書いたように。しかし台湾を嘲ることはあまりにも大げさで、敵軍をほめることはあまりにも媚びすぎだ」と評した。[10] だが私見では、黄遵憲は唐景崧などの高官や郷紳を風刺しているものの、台湾民主国の理想や「台民」の心情を嘲ってはいないと思われる。改革派であった黄遵憲は、日清戦争の終わりから引退するまで民主主義を高く評価していた。本詩に述べる「今日之政民為主」は、彼自身の信ずる思想でもあっただろう。黄遵憲は長年日本に暮らした経験を持ち、日本の近代化を高く評価するとともに、それを達成できなかった中国に不満を感じていた。日本に対する「ほめすぎ」とも見える言葉は、むしろ近代化に失敗した清朝への批判の言葉と解すべきである。本詩は、戊戌の政変が失敗に終わった直後に書かれた。黄遵憲にとって、その失敗の苦々しい記憶はなお鮮明なものであったに違いない。

ただ疑問に思うのは、黄遵憲は本詩においてなぜ台湾の北部の抗日戦争だけを描き、より成功した南部の抗戦を描かなかったのかである。台湾の学者陳漢光が指摘するように、乙未戦争時の中国人詩人の大部分は台湾の抗日運動の「勵志」、つまり彼らの強い意志を強調した。[11] 当時、台湾南部の義勇軍の指導者として日本軍に抵抗した丘逢甲は引退した黄遵憲の家を頻繁に訪ねていたという。[12] それにもかかわらず、黄遵憲は他の詩人と違い南部の抗日運動について一言も言わないのである。私見では、その理由は、詩の前半部と後半部の対照を明確化することで、詩の「諷刺」の効果を最大化したかったからであると考えられる。

六、終わりに

以上、黄遵憲「台湾行」の内容を分析し、その言外（インプリケーション）の意を探求した。黄遵憲は意図的に乙未戦争の緒戦の戦闘と台北の陥落のみを扱い、その後も数年続いた抗日運動を詩に取り込まなかったのである。黄遵憲の日清戦争に関する連作詩には清朝を諷刺する内容が多く、この詩も例外ではない。彼は崇高な理想を唱える台湾民主国の成功を望んでいたが、台湾民主国も清朝と同じく日本の侵攻を食い止められなかった、その受け入れがたい現実を認めている。彼にとって、台湾民主国の崩壊は戊戌の政変の失敗にも似ていただろう。「台湾行」は、その挫折感や祖国の将来に対する憂慮を「諷刺」として表現したと考えられる。

［注］

（1）J.D. Schmidt, *Within the Human Realm* ,Cambridge University Press, 1994 に他の黄遵憲の日清戦争の作品の英訳はあるが、「台湾行」の英訳はない。島田久美子注『黄遵憲（中国詩人選集 15）』（岩波書店、一九六三年）にも収められない。

（2）乙未戦争の経緯については黄秀政『臺灣割讓與乙未抗日運動』臺灣商務印書館、一九九二年や Niki Alsford, *Transitions to Modernity in Taiwan: The Spirit of 1895 and the Cession of Formosa to Japan*, Routledge, 2017 を参考にした。

（3）黄遵憲著、銭仲聯注『人境盧詩草箋注』上海古籍出版社、一九八一年、巻八。

（4）黄遵憲の一八九五年から一八九八年にかけての経歴については主に Schmidt（1994）や銭仲聯（一九八一年）を参考にした。

（5）「台民」は台湾の人民という意味で、清・台湾通史『唐景崧列伝』巻三十六に記載されている唐景崧の台湾民主国の総統としての演説に多く使われている言葉である。

（6）漢・史記『項羽本紀』巻七に「陳勝敗碧當。夫秦滅六國、楚最無罪。自懐王入秦不反、楚人憐之至今、故楚南公曰『楚雖三戸、亡秦必楚』也」とある。

（7）晋・晋書『庾亮伝』巻七十三に「亮並不聽、而報嶠書曰『吾憂西陲、過於歴陽、足下無過雷池一歩也。』」とある。

（8）Alsford (2017), p.175.

（9）Schmidt (1994), pp.159-173.

（10）洪棄生『寄鶴齋詩話』臺灣省文獻委員會、一九九三年、一三九頁に原文は「此詩可稱佳製、手筆實不減仙根。但於譏諷臺灣處、未免太抹殺、於誇耀敵軍處、未免太貢諛！」とある

（11）陳漢光「乙未抗日與中國詩壇」、『台北文物』、九巻一号一九六〇年三月、九〇～九九頁。

（12）Schmidt (1994), p.42.

（大学院博士前期課程学生）

SUMMARY

On Huang Zunxian's "Song of Taiwan"

Thom van Dam

This paper provides an analysis and translation of "Song of Taiwan" (*Taiwan Xing*) by Huang Zunxian, a poem on the Japanese Invasion of Taiwan in 1895, which is part of a larger series of poems he wrote on the Sino-Japanese War of 1894-1895. In a mostly narrative epic poem, Huang first describes how eager the Taiwanese were to defend their newly formed Republic, praising their courage and valor, only for the poem to take a drastic turn and switch to the humiliating capitulation to the Japanese a few days after. The paper attempts to address both the historical reasons, as well as the personal reasons for Huang Zunxian to portray the Taiwanese resistance movement as he did.